

「渡辺所長は理想ばかり振りかざして、何にも現場の事なんてわかってない。こんなやり方、もうついていけません！！」職員である山田の声が響いた。渡辺は今まで地域に開かれた施設を目指し頑張ってきたつもりだったが、この言葉を聞いて愕然とした。山田は富山福社会で、新しくグループホームを立ち上げる時に異動となった一人で、異動前の特養でも10年以上経験がある50歳代のベテラン介護福祉士の一人である。

渡辺も他法人において10年以上に渡り、従来型の特養で経験のある介護福祉士である。富山福社会で新しく地域密着型の施設であるグループホームを立ち上げることになった時、法人本部の田中総合施設長より声を掛けられ転職してきた一人である。「いつか自分が思い描く理想の施設を一から作り上げたい」という気持ちがあった渡辺にとって、とても良いタイミングであった。

田中総合施設長とも検討を重ね「地域に開かれ、あたり前の生活をずっと続けられる暖かい居場所をつくります」という事業所の理念を設定し、新しいグループホーム（以下GH）がスタートし3年が経過した。

GHの職員は、半数は従来型の特養からの異動であり、残りの半数は新規採用した職員である。渡辺は最初の1年はベテランスタッフも多いこともあり、あまりあれこれ言わず自主性に任せ様子を伺っていた。そんな状況もあり、開設当初のGHは渡辺が考えているような「あたり前の生活」ということとは程遠いものであった。どことなくGHが「ミニ特養化」しているような感じを覚えた。そのGHの玄関には鍵をかけられ、自由に出入りができないような状況になっていた。また、日課についてもタイムテーブルが決まっており、皆が決まった時間に食事を行いそして決まった時間に排せつ介助を行っていた。入浴も決まった曜日に「さあ、お風呂に入りましょう！！」と声をかけられ入浴を行っている状況であった。外出さえもなかなか出来ていない状況だった。

また、深刻だったのは職員の離職である。このGHに異動した職員や新規採用した職員は離職をするか異動希望を出してしまうのだった。

渡辺は自身が考えている利用者中心の暮らしを行うため、勤務時間内外問わずミーティングを重ね、自らが考えている理想をスタッフに伝えていった。「24時間シート」や「ひもときシート」「センター方式」を作成し利用者がどのように毎日を過ごしているか（過ごしたいか）アセスメントを行った。また重度の認知症の利用者が多かったが、玄関には鍵をかけず、外出をしたいという利用者には職員が横につき添った。食事や排せつ、また入浴においても一人ひとりのリズムで行えるようにと職員の意思統一を図った。こうした改革を進めた結果、多少、離職率は減った。

1 しかし、実際には職員が手薄となる入浴の時間帯にはコッソリと玄関の鍵を掛けたり、排せつや入浴もルーティン化して、いつも同じ時間帯になっている現状もあった。利用者と「なじみの関係」を築く事ができる安定した環境へはまだまだ道半ばであった。

5 渡辺は若手スタッフの教育に力を注いだ。新人が半数以上であったため、OJTを中心に研修を行っていたが、それだけでなく OFF-JT も積極的に力を注いだ。現場職員の人数が減ってしまう為きつかったが、認知症に関する研修やそれだけでなく専門職研修以外の「組織人として」等の OFF-JT の研修案内があると、新人職員に声をかけ研修に派遣した。そうした渡辺の積極的な姿勢に、田中総合施設長は一定の評価を示し黙って渡辺に GH の運営を任せていた。

10

とある日の夕方、GH のスタッフステーションにいた渡辺に話があると山田がやってきた。

「所長、もうやっていけません。所長が言う通り、確かに利用者に寄り添う事や地域に開かれた施設にすることは大事です。けれど、今のスタッフの数では外に出ていこうとする利用者について行くと、施設内の利用者を見ることはできなくなります。」

15 「若いスタッフの研修だってそう。研修は大事ですが、どうしても現場の職員数が少なくなってしまう。その間に事故があったら私たちは責任を取れません」

「好きな時に食事をし、好きな時に入浴をする。誰もが、そうできたらと思っています。けれど、気持ちばかりが先走っていて、介護には何の根拠もない。まだ、働いて1年や2年の新人たちの力量ではどうやって事故のリスクが大きすぎます。ベテランスタッフは皆そう言っていますよ。」

20

「渡辺所長は理想ばかり振りかざして、何にも現場の事なんてわかってない。こんなやり方、もうついていけません！！」

25 渡辺はしばらく呆然としてしまった。確かに理想とする GH がすぐに来るとは思わない。しかし利用者中心とした暮らしを行う為に必要な事を言ってきたはずである。また、離職率も少しずつではあるが減り、理想に向かって軌道に乗っていると感じていたが自分のやり方は間違っていたのかと肩を落とした。

30 「山田さん、もう一度どうしたらいいか一緒に考えてみましょう。」

渡辺はどういったら良いのかわからず、必死にその言葉だけを絞り出したのだった。

35

---

不許複製

野村幸伸